

# 札幌大学（2019年リーグ戦1部6位）

9月12日、札幌市豊平区の札幌大のグラウンド。初秋の到来を思わせる涼しさの中で、札幌大と北星学園大アメリカンフットボール部の合同練習が始まった。濃紺のヘルメットの北星学園大の15人に対して、白ヘルメットの札幌大は6人。札幌大の小笠原大剛主将（4年）が「いつもは少ない人数なので、合同練習で思い切り練習したい」と歓迎の言葉を述べて、選手たちがポジション別にグラウンドに散った。札幌大の部員は8人だが、この日は2人が教育実習などで欠席。6人はライン組に3人、残る3人がレシーバー、QB、RBの各組に分かれた。

ライン組は、北星学園大がまだコンタクト練習ができないため、エアダミーを使ってのブロックから開始。プルアウト、パスプロテクションと進む。OT兼DEの小笠原主将が力強いブロックを見せ、北星学園大選手も負けじと鋭い動きで応じた。パスラッシュの練習では両校の選手が助言し合う場面も。ライン、バックス全員が参加するフォーメーション練習では、守備チームに入った札幌大選手が鮮やかにパスをカットするなど、本番を彷彿とさせるシーンもあった。練習終了のハドルでは小笠原主将の感謝の言葉と次週の合同練習の確認を行い2時間のメニューを終了した。

道内アメリカンフットボール部の草分けとして1971年創部の札幌大。今年で46回目を迎える道学生選手権（秋季リーグ）では、第1回から4連覇するなど過去8回の優勝を誇る名門だ。しかしここ数年は部員不足に泣き、昨季も登録選手14人でリーグ戦に臨み、5戦全敗で最下位。札幌学院大戦ではけがで退場選手が出て、一時8人で戦う場面もあった。2部優勝の室蘭工業大との入れ替え戦も惜敗し、9年ぶり4度目の2部降格が決まった。

名門復活へ渡辺健斗新監督を迎え、2年生以上8選手で再出発した今季。最優先課題の新入部員獲得に取り組む前に新型コロナウイルス禍に巻き込まれた。2月末の道の緊急事態宣言に始まり、国の非常事態宣言もあって大学が施設を閉鎖。前期はリモート授業になり、新入生の登校も禁じられた。アメフト部は6月下旬からグラウンドを使った個人練習が解禁になり、8月下旬から全体練習も再開できたが、新入生勧誘はSNSで発信のみ。小笠原主将は「大学のサイトに新入部員募集の動画を載せられないとかけあったが、だめだった」と言う。8人だけの練習が続く中で秋季リーグが近づき、「時間切れ」で部の歴史で初めてのリーグ戦棄権を決めた。

小笠原主将は「リーグ戦開幕の日程を遅らせたなら、部員を確保できるのでは」とコーチに相談したが、実らなかった。「2部に落ちて最初のミーティングで、1年で1部復帰を目標にした。コロナ騒動が起きたが、秋の試合はできるはずと思っていたので、リーグ戦棄権が決まったときは正直納得できなかった」と振り返る。コーチらが計画する10月下旬の練習試合が、今は唯一の目標になった。昨年から指導する弓立恵亮コーチ（45）＝北海道大OB＝は「8人の練習は個人のスキル向上を目指すのが中心。選手たちは名門という言葉を意識せず、自分たちがどれだけ上を目指せるかと懸命だ」と言う。札幌学院大に続いて2校目となった北星学園大との合同練習でも、選手たちの意欲的な動きが目立った。

小笠原主将は「来週から新入生のガイダンスが始まる。サークルの説明会もあるので、アメフト部をPRしたい。ピラも配りたい」と意気込んだ。名門復活は2021年に持ち越しになったが「かつてラインの札幌大と言われたと聞く。来年のチームは、他校からあこがられるチームになってほしい」と後輩たちに熱いバトンを引き継ぐつもりだ。



【合同練習でブロックの練習をする札幌大アメリカンフットボール部員（白ヘルメット）】